納
丁香青木香
會前東大寺

第四十九圖　密陀彩繪箱三合の二（二）

（縮寫五分ノ三）

前掲香箱の側と背とを現はす。箱の稜に沿つて縁を取り又香狹間の透ある床脚を作る、四圍の文樣は扁行せる忍冬唐草の間に龍頭を配したもので筆致甚だ濶達勇壯である。縁にも一種の忍冬文を覗かせ、床脚にも忍冬唐草と雲とを配してゐる。而して之等の文樣は蓋表と同樣赤白二色の密陀を以つて描く。

金具は何れも鐵製黒漆塗で正面に一所背面に二所ある。

第五十圖　密陀彩繪箱三合の二（三）（原寸）

前掲箱正面の一部を原寸に示す。文様中白く鮮かなのは白密陀、稍灰色に見えるは赤密陀の部分である。龍頭や唐草の莖に見られる、白線に沿つて赤線で隈どる技法は、玉蟲厨子の密陀繪と相通するところがある。

第五十一圖　密陀彩繪箱三合の三（一）

（縮寫約五分ノ二）

竪四六糎五　横六〇糎七　高一四・糎六

木製で、内外ともに黒漆を塗り、其の外面に當つて色密陀で花鳥の模樣を描く、蓋は印籠蓋で蒲鉾形に面を取り、箱の角は廻してある。

第五十二圖　密陀彩繪箱三合の三（二）

（縮寫七分ノ三）

箱の蓋表と側面とを示す。蓋表は鳳凰を主題にして之に花枝飛雲寳相花をあしらつたものを廻旋的に描き、側面は花に乘る鳥を中心にして飛雲花枝蝶鳥を均正に配し描く。

而して之等の畫圖に當つては赤・黄・白・紫・綠・綠青・群青等の色密陀を巧みに驅使し、且つ切箔をも應用して賦彩甚だ艶麗を極めてゐる。

第五十三圖　密陀彩繪箱三合の三（三）

（原　寸）

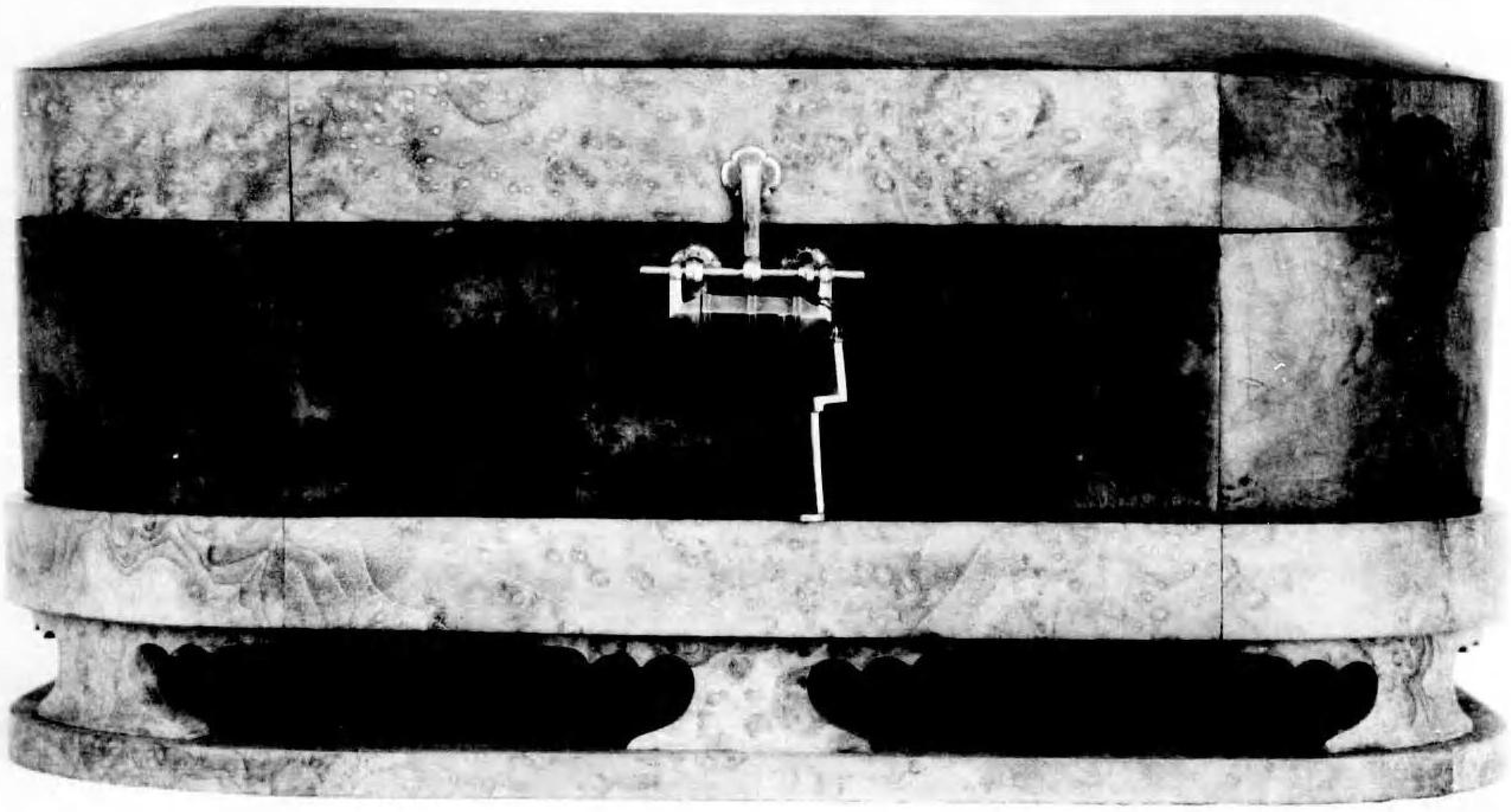
蓋表の一部を原寸に示す。鳳凰の嘴・頸・脚と花枝の幹は切箔を押して作り、鳳凰のとさかと腹と翼の一部並花輪は赤に紫、羽と葉とは緑と縹の密陀にて暈繝に描く。

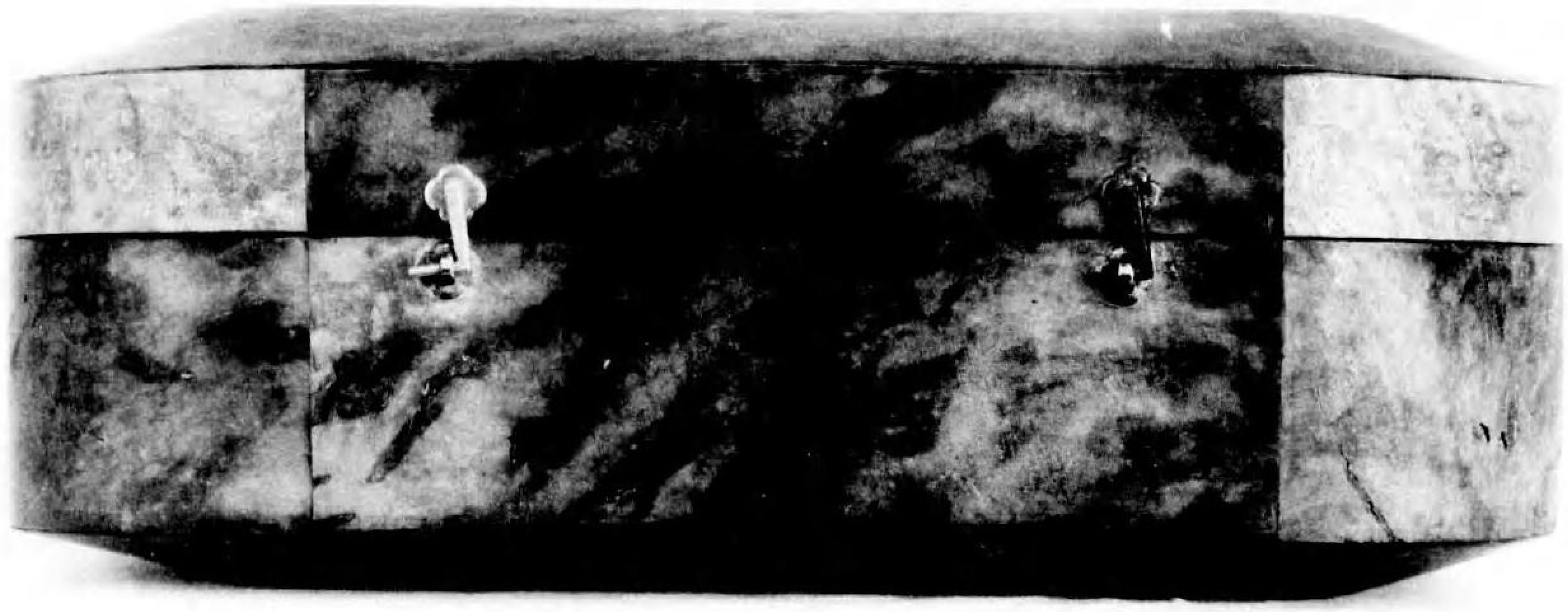
第五十四圖　楩楠箱　（縮寫四分ノ五）

箱　竪三〇糎　横二六糎七　高一一糎四

床　竪三〇糎三　横二七糎三　高五糎二

楩楠は支那南方に產する大木で櫲樟の類と云ふ。其の木理を見るに樟木の根元の共れに類するは蓋し偶然では無い。箱は長方形をなすが其の角は大きく圓められて所謂撫角をなし、又蓋・身共に大面を取る。正面鐶子と背面金具の一個、並に床の全部は新補である。





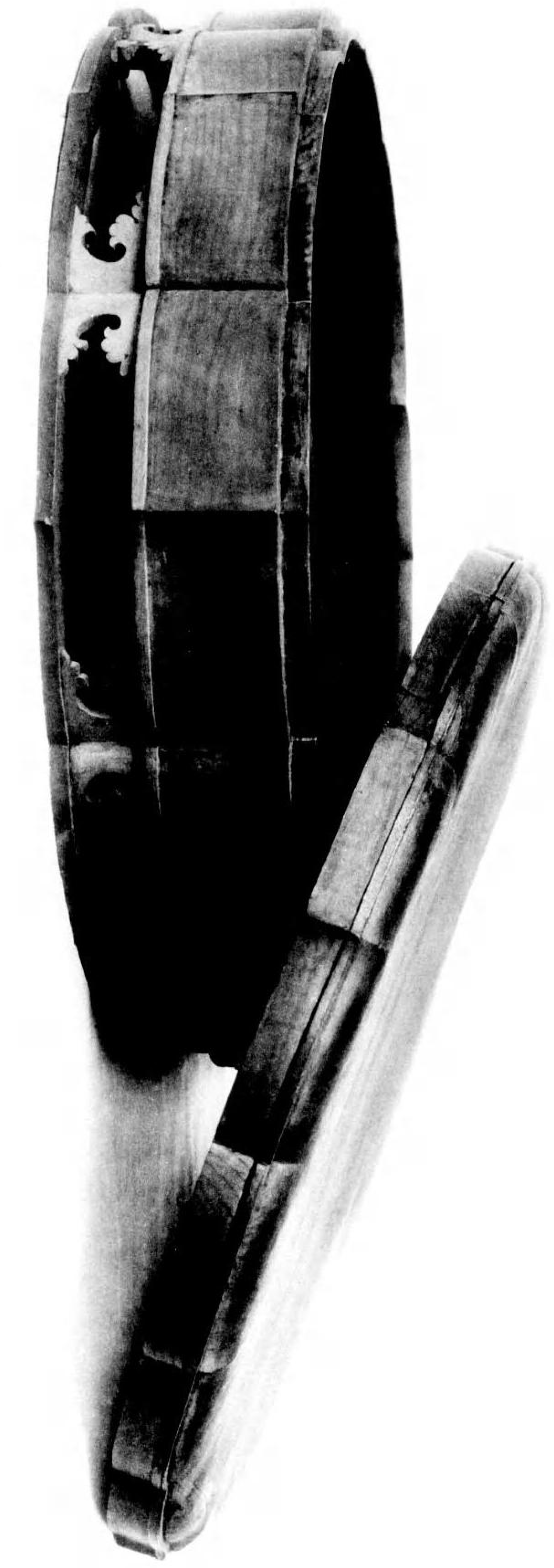
第五十五圖　白檀八角箱

（縮寫約三分ノ二）

長徑三四糎　總高六糎六

白檀製にて、平面八稜形をなし、下に同形の床脚をつけ香狹間を透す。香狹間の刳形は殊に美しい。蓋は印籠蓋で、其の表は稜形に隨つて花形の隆起を作る。床脚の臺輪は蘇芳染の黒柿製底裏には「吉祥堂」の墨書がある。

（原寸）



第五十六圖　金銀繪木理箱

（縮寫八分ノ五）

竪二九糎四　横二三糎三　總高一三糎四

床脚ある長方形印籠蓋の箱で蓋表並箱の四周は朽木を張り稜に沿つて縁をとり、その縁には金銀泥の小花文を散らし、朽木張りの部分には金泥で木理を描き起す。香狭間を透かす床脚の束には銀泥の花卉文、臺輪側面には銀の四瓣花文、同じく上面には小花文を金銀交互に配してゐる。

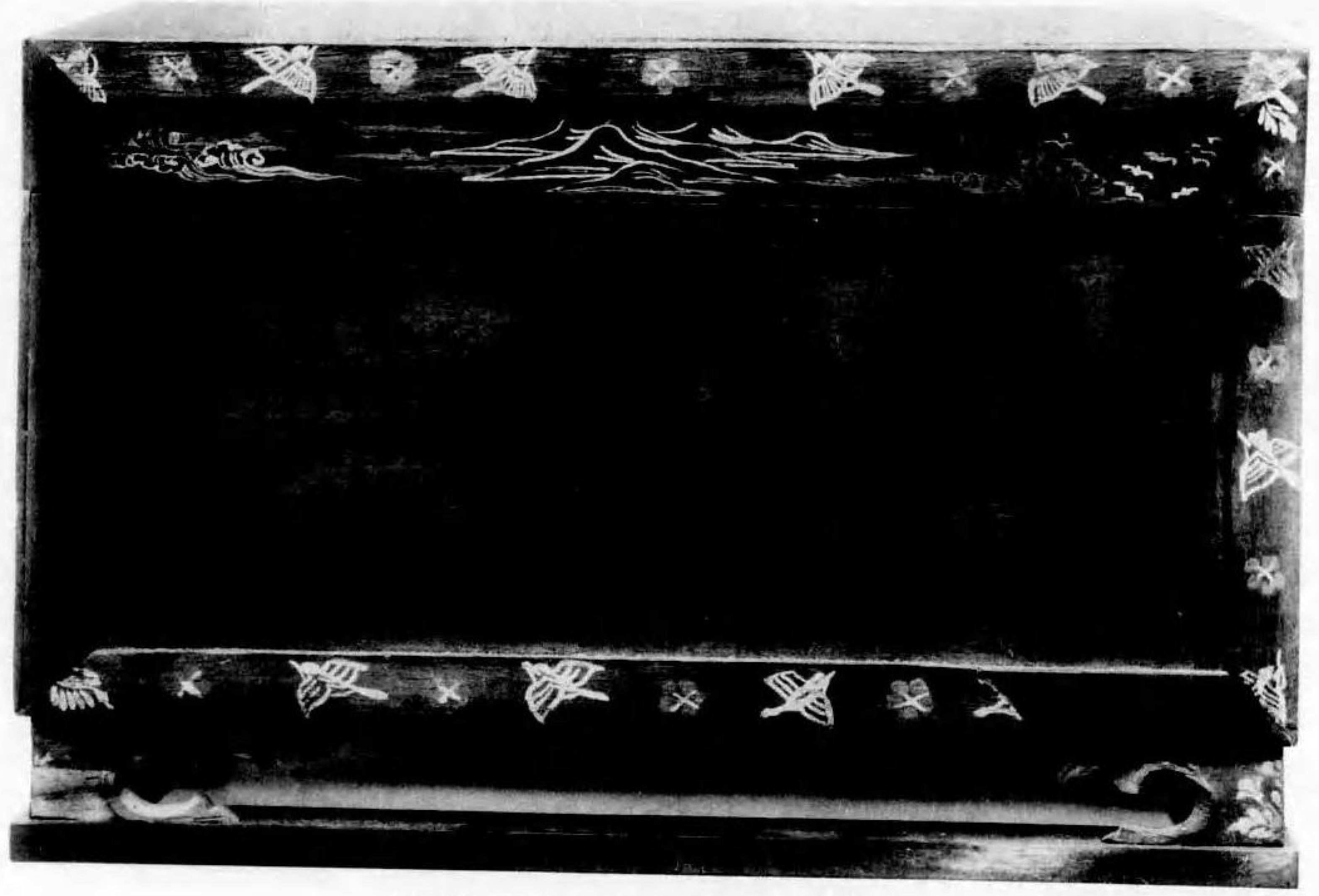
第五十七圖　黒柿蘇芳染金銀山水繪箱

（原　寸）

竪三八糎八　横一八糎　總高一二糎五

これも床脚ある長方形印籠蓋の箱であるが身は殆んど新補である。黒柿の材を用ひ、蓋上面には面を取り側面には押縁を作り、蘇芳を以つて之を染め金銀泥で山水繪を描く。圖樣は岳を四方より築き樹木を植ゑ下草を描き飛鳥瑞雲を配し、其の構成は所謂海礒鏡の文樣に類す。又側面には金銀泥で遠山を描き、押縁には花文と飛鳥とを交互に置く。

圖は蓋上面と側面の一を出す。無文の箇所は新補の部分である。



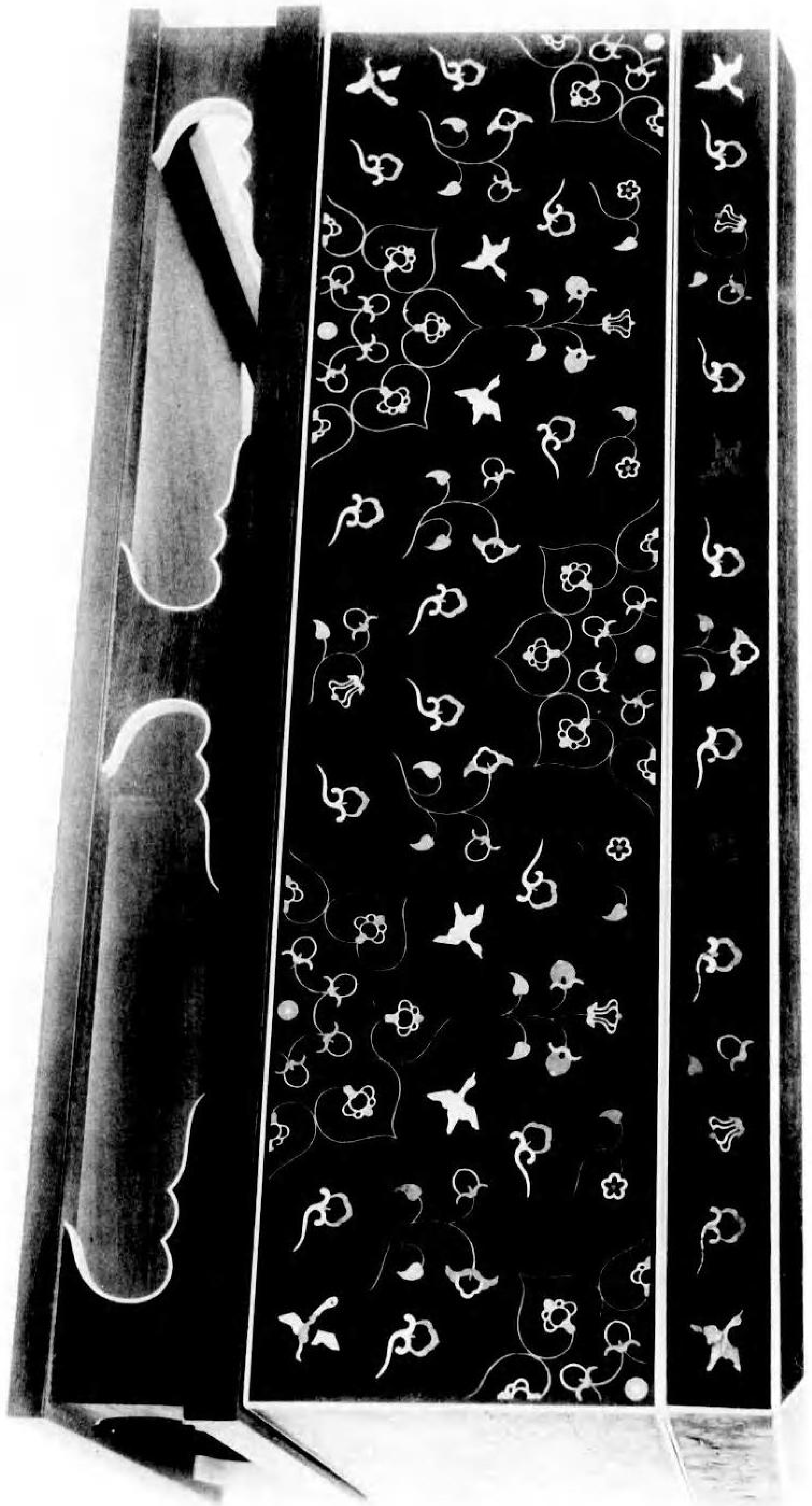
黒柿蘇芳金銀山水繪箱側面（原寸）

第五十八圖　紫檀木畫箱（一）

（縮寫約九分ノ五）

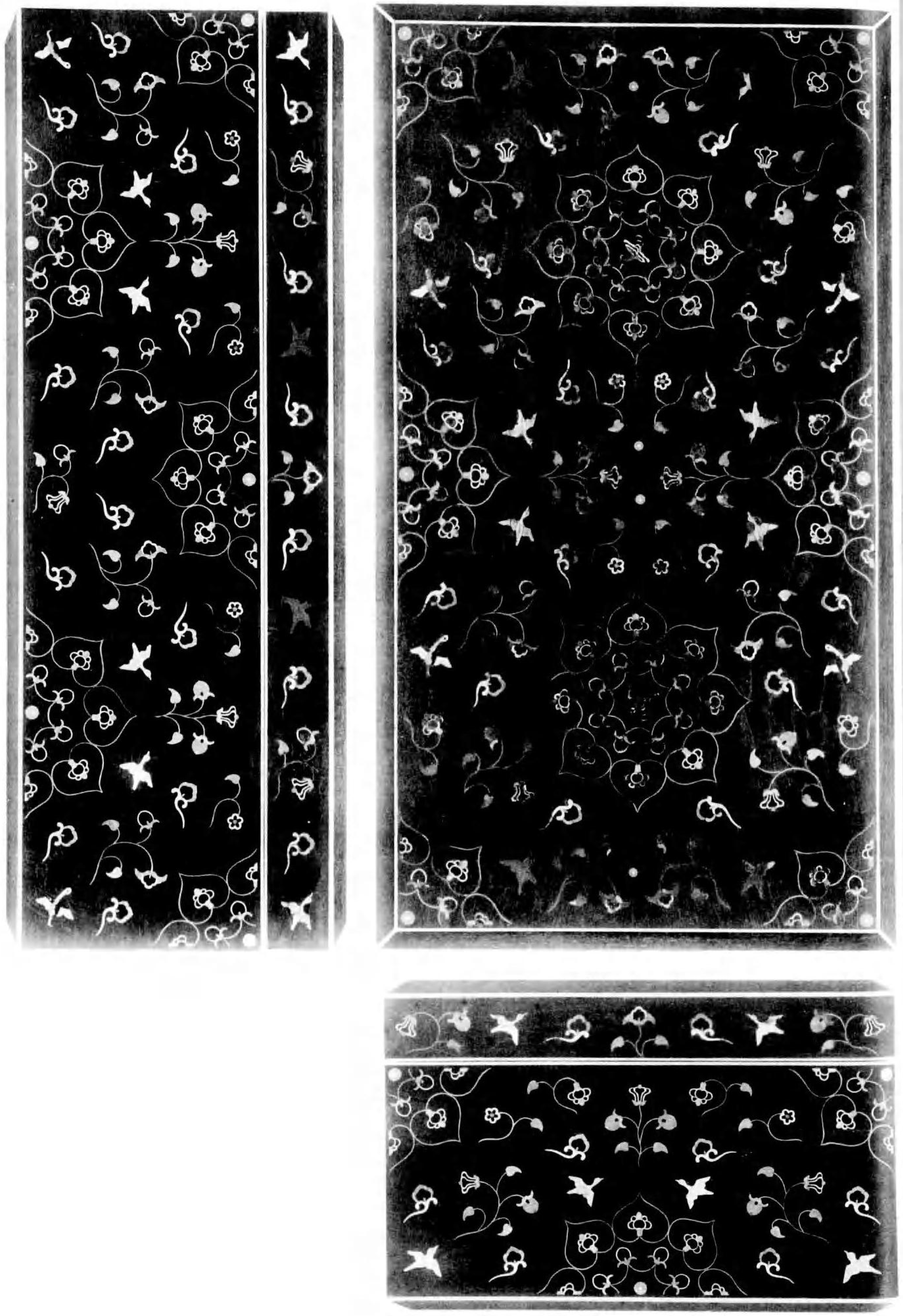
箱　竪四二糎三　横二三糎五　高一五糎三
床　竪四三糎二　横二四糎二　高五糎八

黄楊木に紫檀張りした長方形の箱で、蓋身共に面を取る。其の各稜には白牙の界線を嵌め、紫檀張りの面には木畫を作る。蓋と身の接合は、所謂印籠蓋の如く身に立ち上りを作らず、蓋の四隅に舌狀を造り出してゐる。身並に床は後補である。



第五十九圖　紫檀木畫箱（二）　（縮寫五分ノ三）

前掲紫檀木畫箱の蓋面と二側面を現はす。蓋の木畫は舊物であるが身は殆んど新らしい。新舊自から異るを注意せよ。



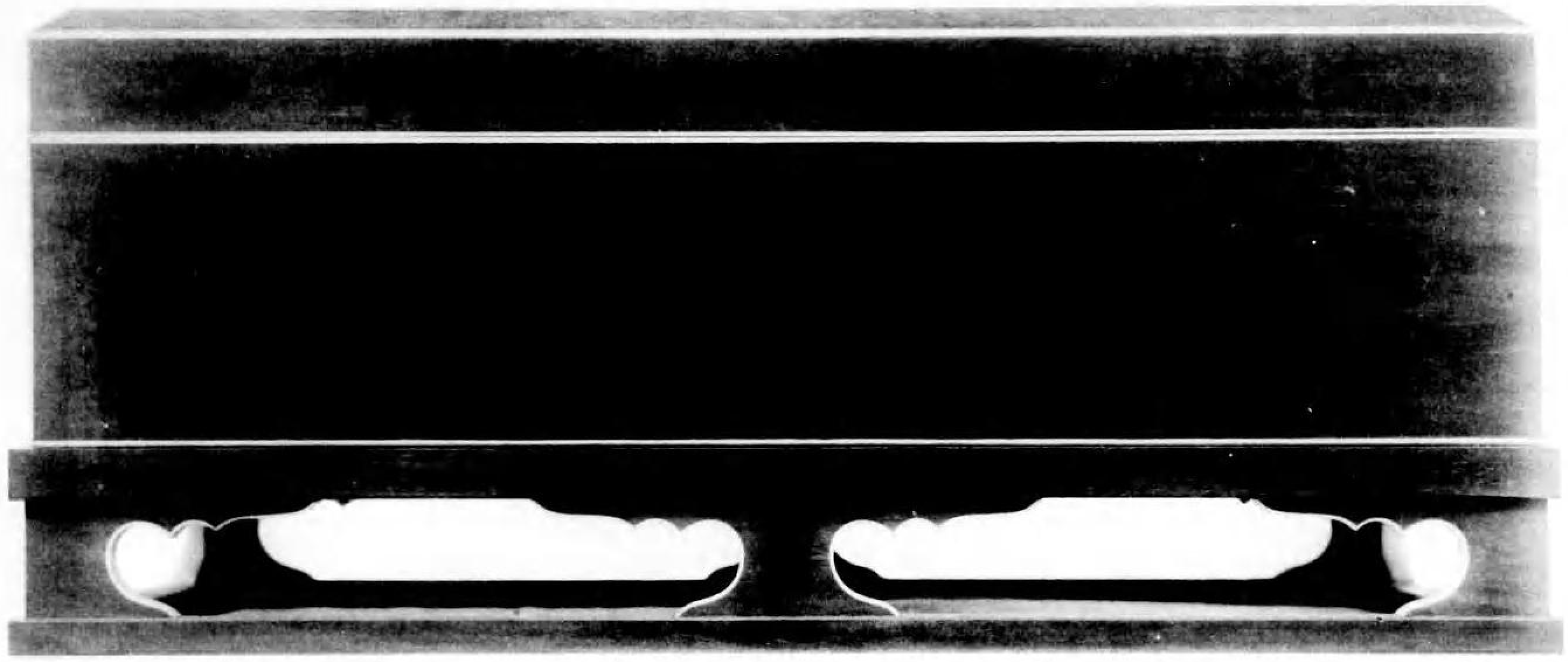
第六十圖　紫　檀　箱

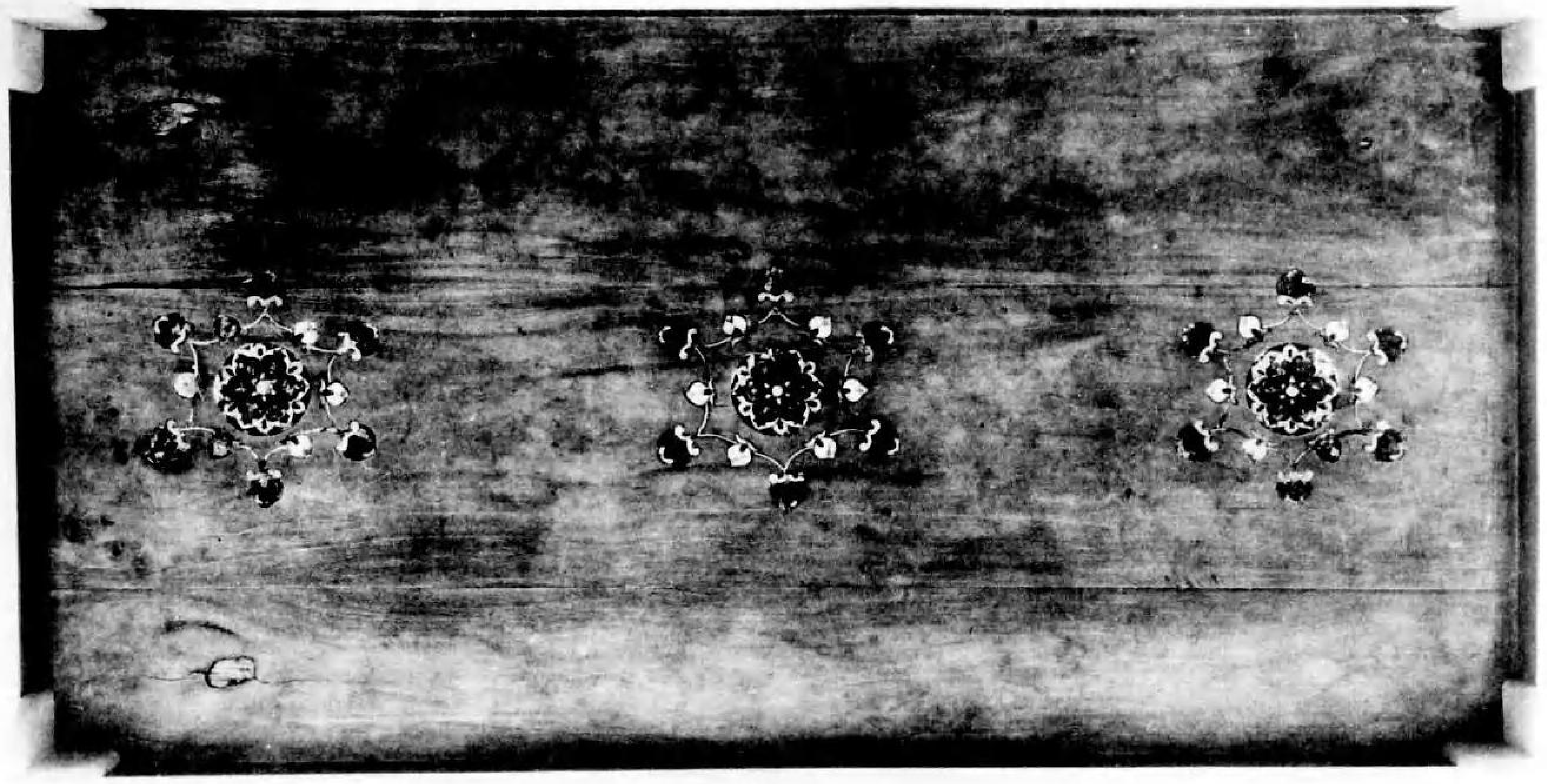
（縮寫約九分ノ五）

箱　竪四一糎五　横二一糎五　高一三糎

床　竪四二糎七　横二三糎五　高五糎七

黄楊木に紫檀を張つて作り、蓋と底には面を取り、別に床を具す。箱の各稜には白牙の界線を嵌め、床脚香狹間の小口は白牙の板で貼る。又蓋裏には其の四隅に舌狀を着け、中心に三個の窠文を木畫してゐる。木畫には綠牙・白牙・唐木・黒柿等を用ふ。身並床は新補である。





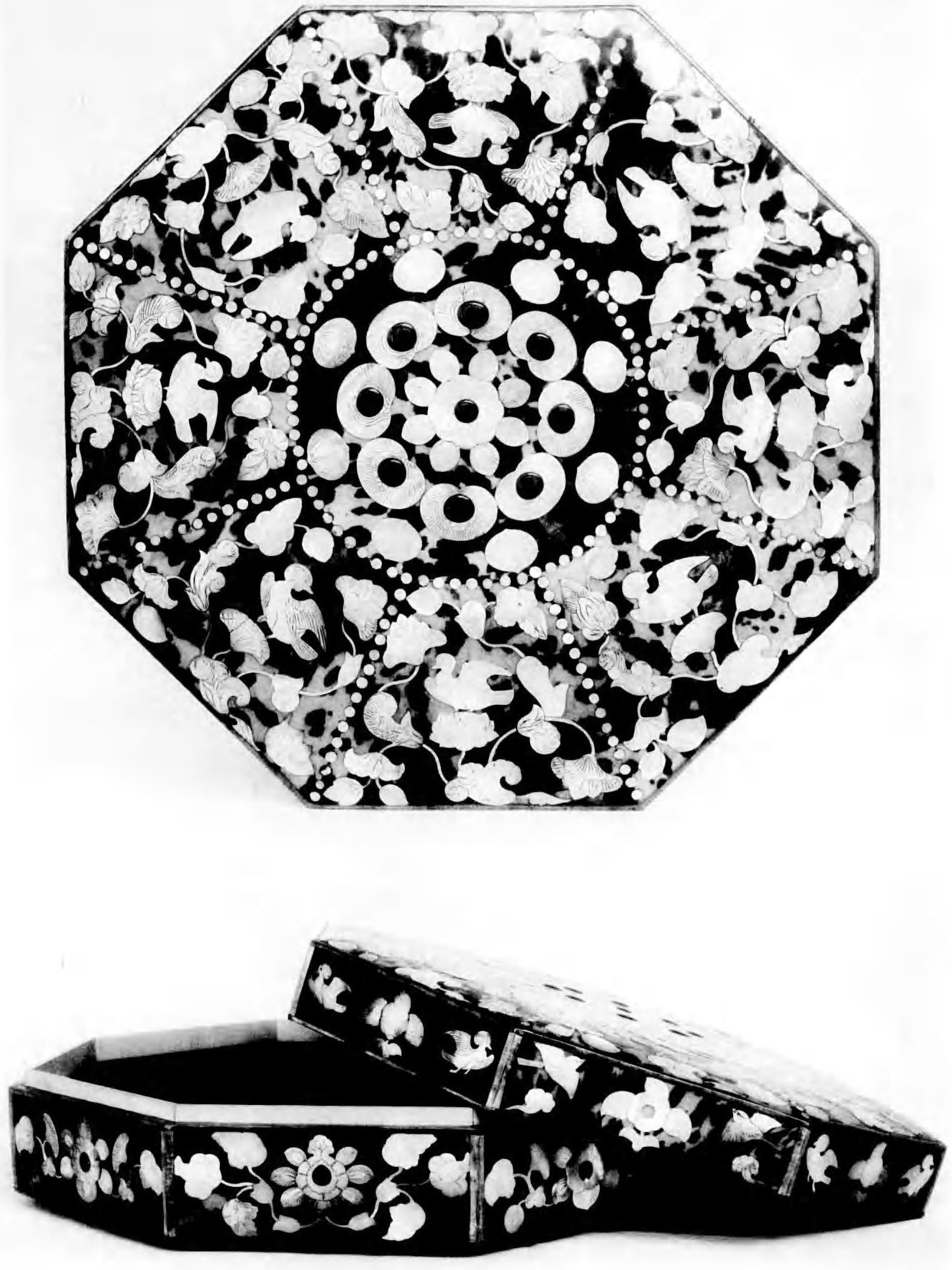
第六十一圖　瑇瑁螺鈿八角箱（一）（上縮寫九分ノ五、下二分ノ一）

長徑三九糎二　一邊長一五糎　高一二糎七

正八角形印籠蓋の箱で、蓋表は微かに隆起す。全面金箔押しの上に瑇瑁を張り、螺鈿にて花鳥の文様を作り、花心に琥珀を伏せたもので、其の瑇瑁の斑を通してくる鈍き金光は青貝琥珀の色と相映じて甚だ美しい。

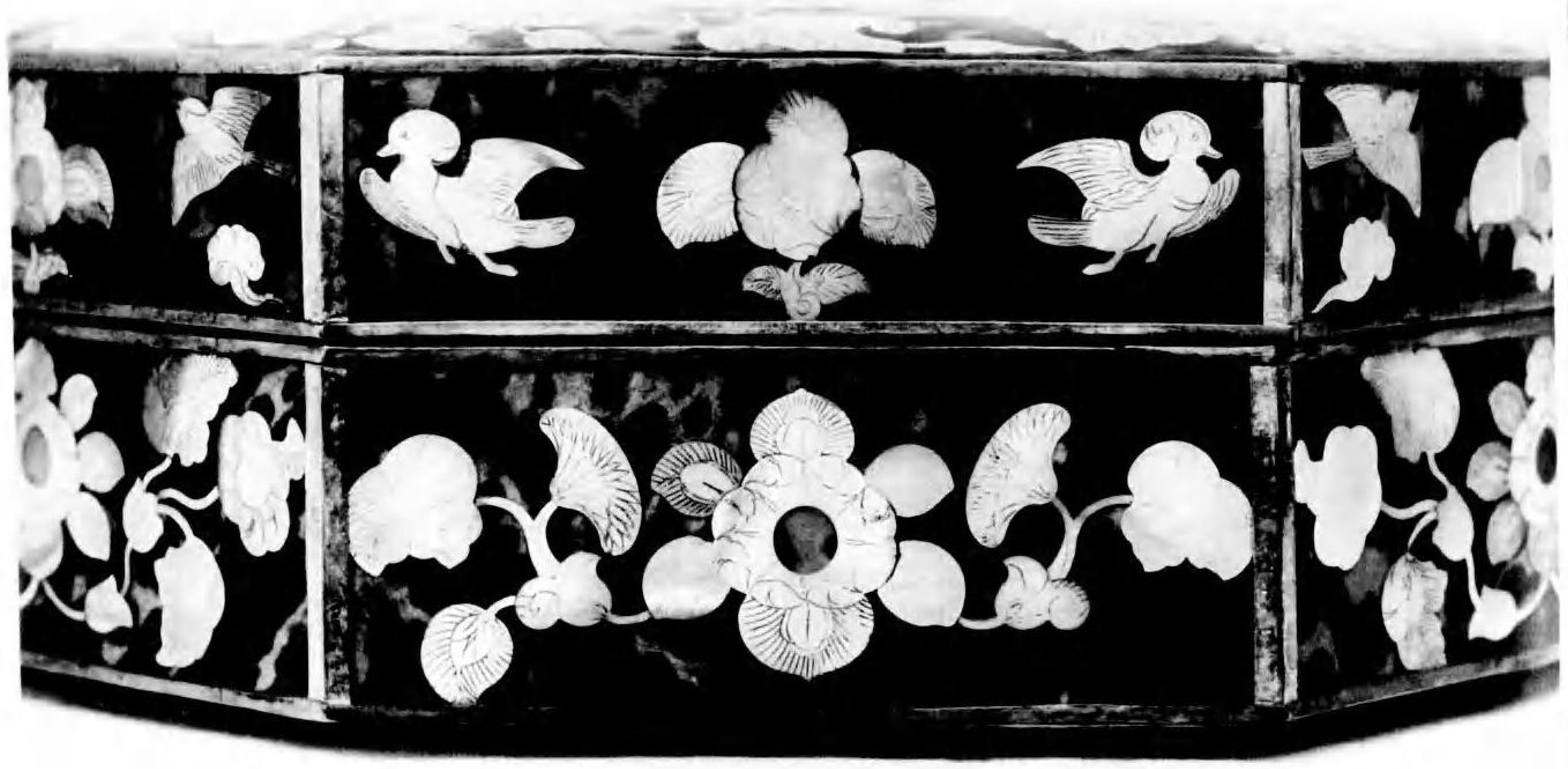
蓋表の文様は中央圓相中に大花文を作り、其の周圍に蓮葉に乘る鴛と、花にのる鶩とを交互に配したもの。側面は蔓草・花卉・飛雲・飛鳥を集圖反復してゐる。

尙箱の各稜には銀板の覆輪を施してゐる。



第六十二圖　瑇瑁螺鈿八角箱（二）　（原寸）

前掲八角箱の側面を出す。八角の各面共の文様は相似てゐるけれども、よく見ると蓋身共に各々二種の文様を反復してゐる。蓋し、蓋表の鴛鴦二種の圖様に對せしめたものであらう。



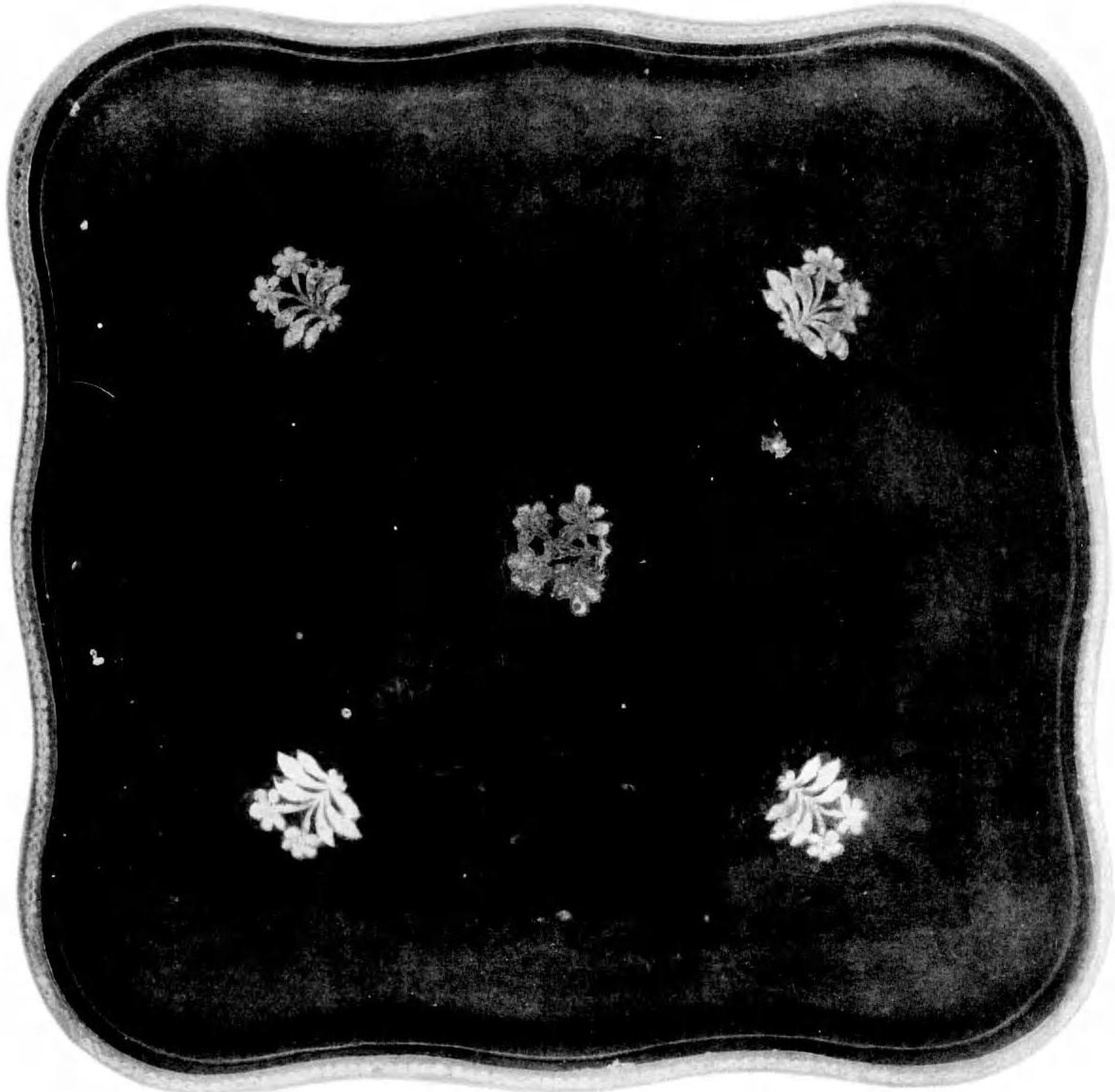
第六十二圖 螺鈿鴛鴦ノ筥

第六十三圖　銀平脫箱中蓋　（約原寸）

一邊長二三糎五　高二糎二

正方形の角を圓くし、且つ各邊を屈曲させた不思議な平面をなしてゐる。口緣の形から箱の落し蓋と察せられるが、之に對する箱も蓋も見つからない。木製の素地に布を張り黑漆をかけ銀平脫の文樣を施したもので、其の上面には花卉文を對角に配し、緣には連珠文を繞らしてゐる。

圖版上は平面、下は斜側面を示す。



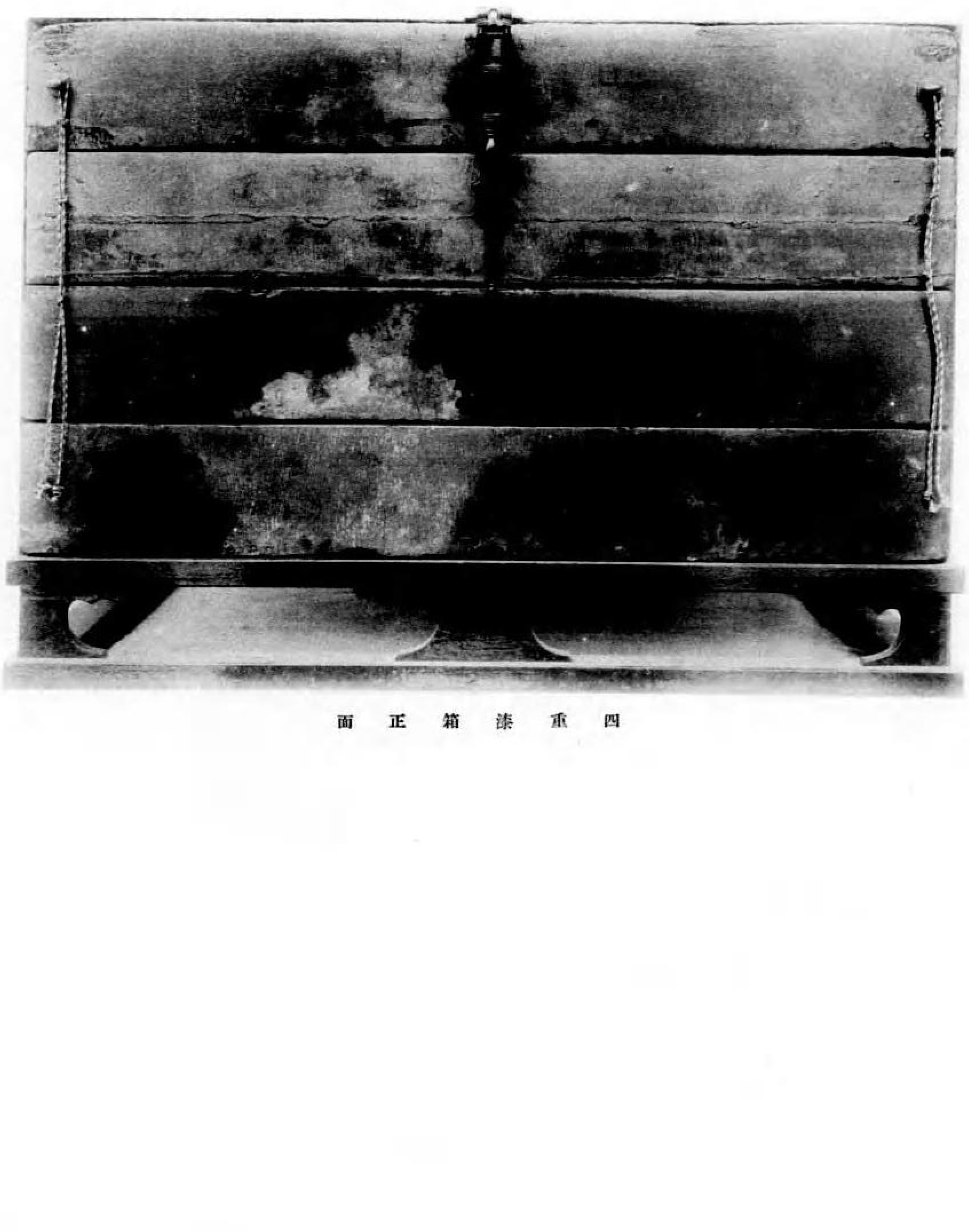
第六十三圖 [illegible]

[illegible]

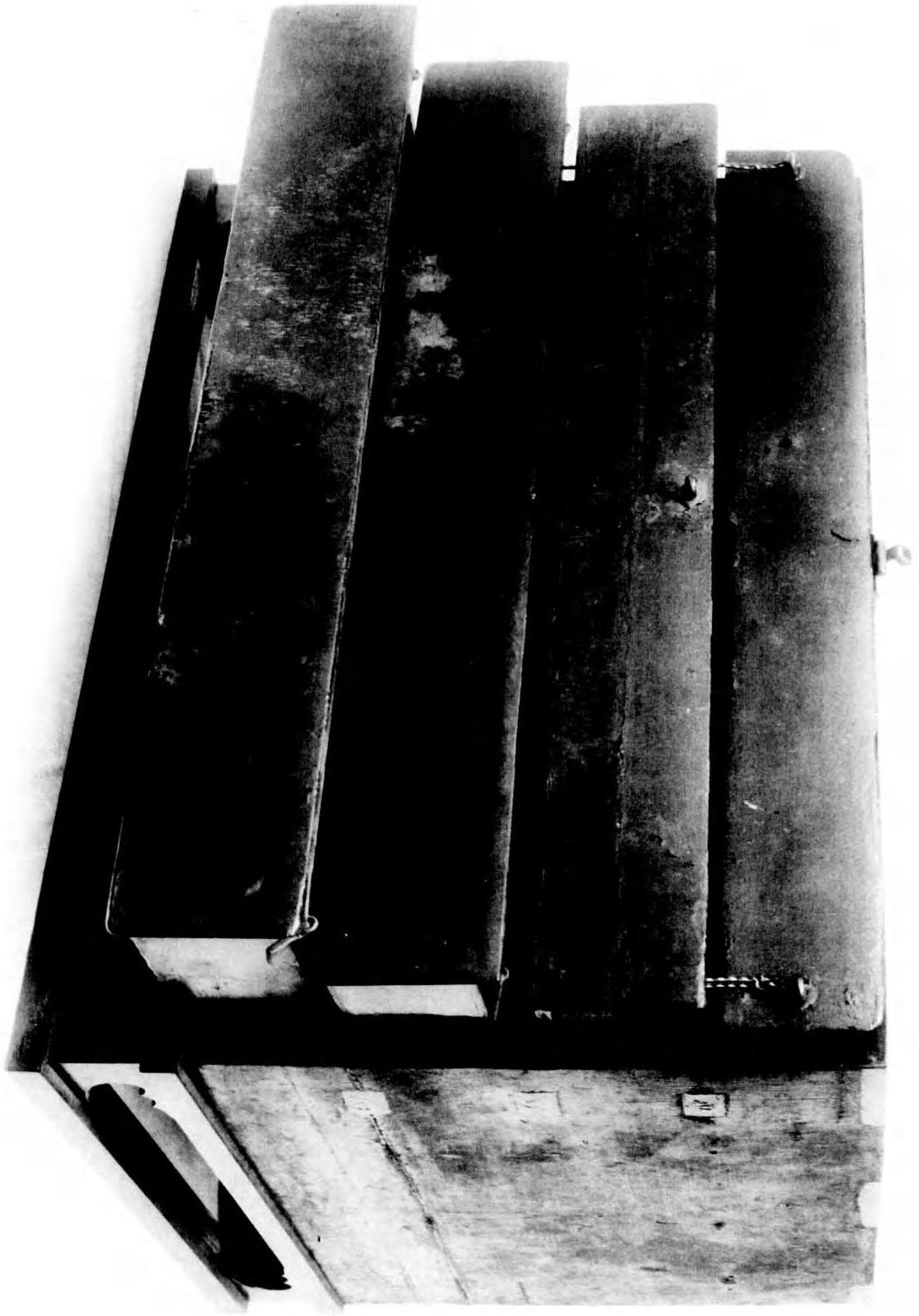
第六十四圖　四重漆箱　（縮寫約五分ノ二）

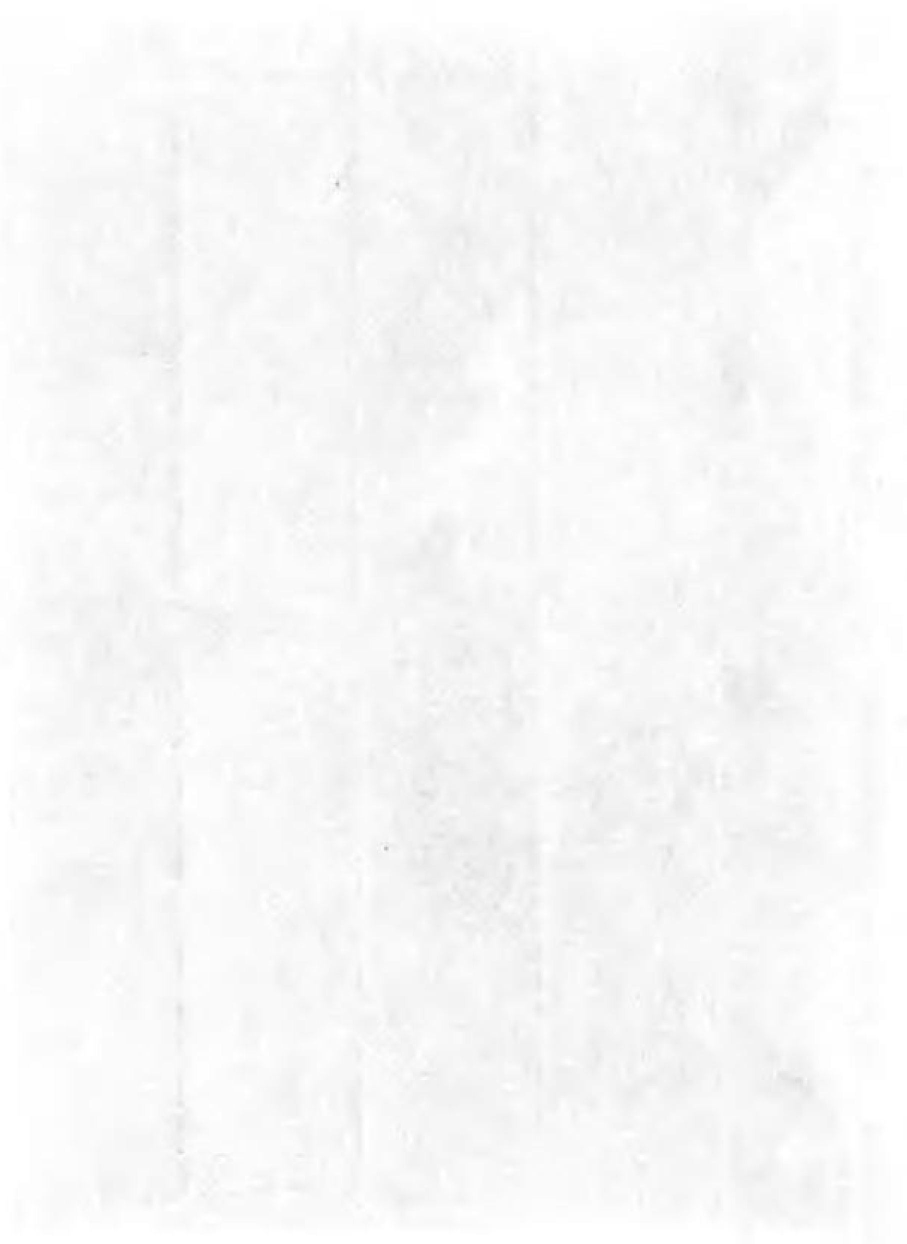
竪五二糎八　横三八糎五　總高三八糎三

箱と云ふより四重小抽出しの形である。木製黒漆塗りで、香狭間の透ある床脚をつけてゐる。最上層の抽出しには兩端に環を着け雜色緒を結んでゐるが、以下のものには此の事なく、其の內面兩側に掛金の裝置がある。從つて最上層の抽出しに鏁子さへすれば、以下の抽出しも之を窺ふ事の出來ない構造になつてゐる。



四重漆箱正面

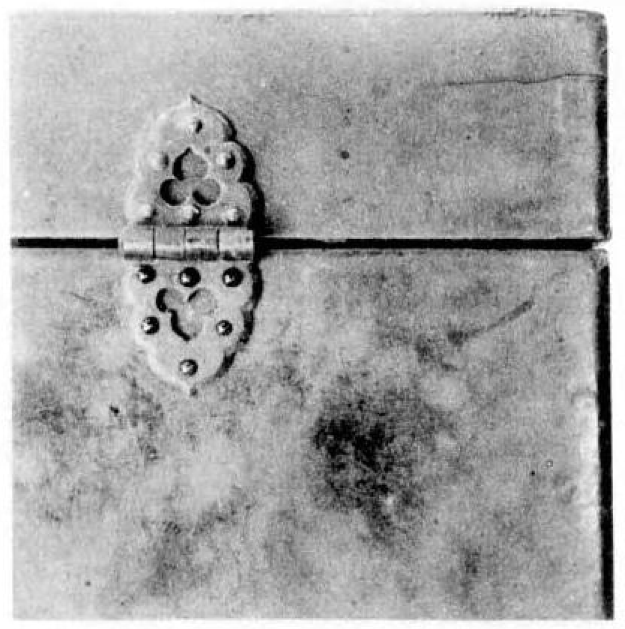




第六十五圖　漆箱四合の一（上）　（縮寫約三分ノ二）

竪二九糎七　横一四糎八　高一〇糎七

木製、黒漆塗、印籠蓋の箱で、共の正面には鏁子背面には二個の蝶番をつけてゐる。蝶番並に鏁子の金具は銅製漆塗である。又箱内には白紙の覗がある。

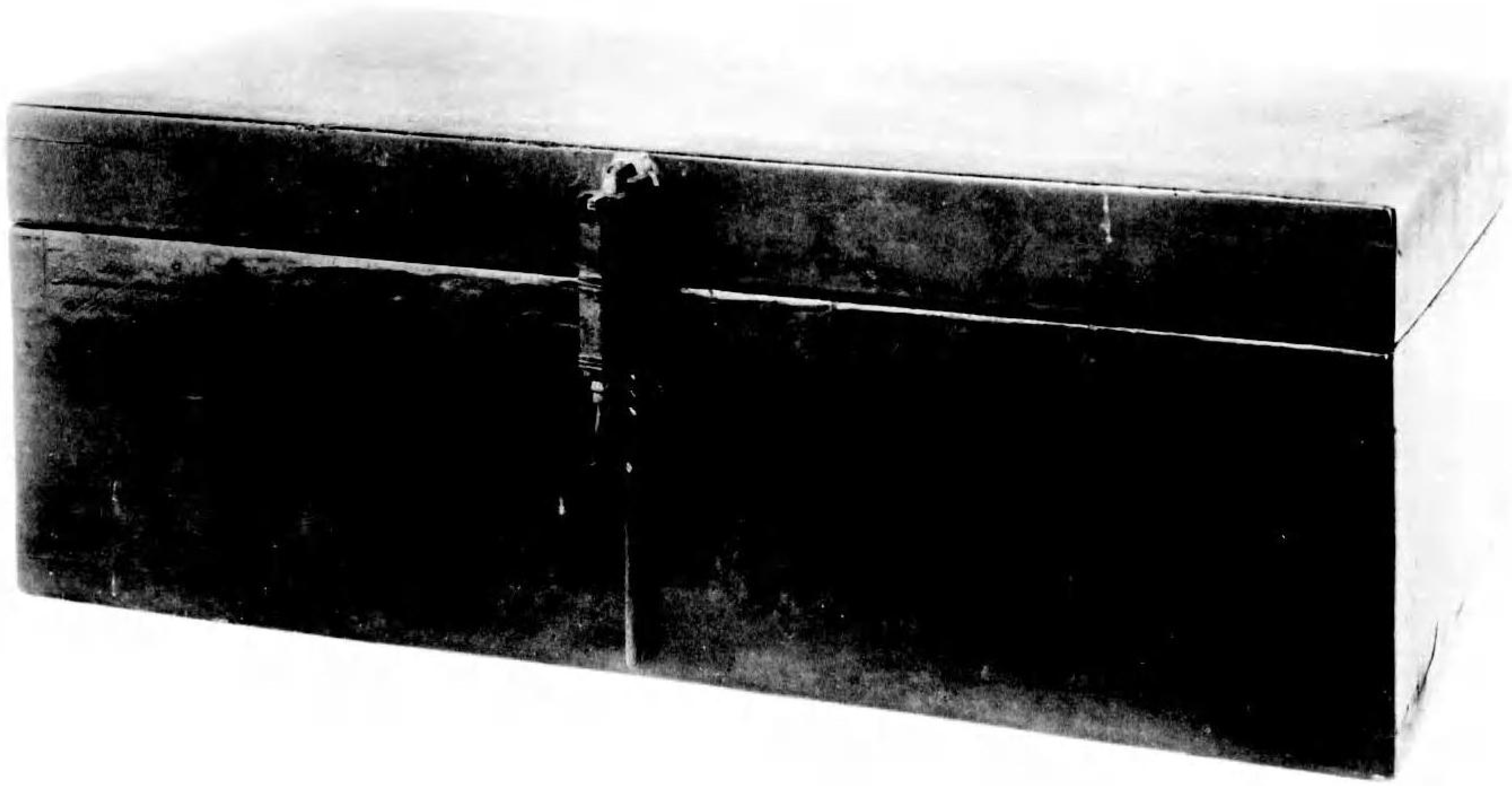


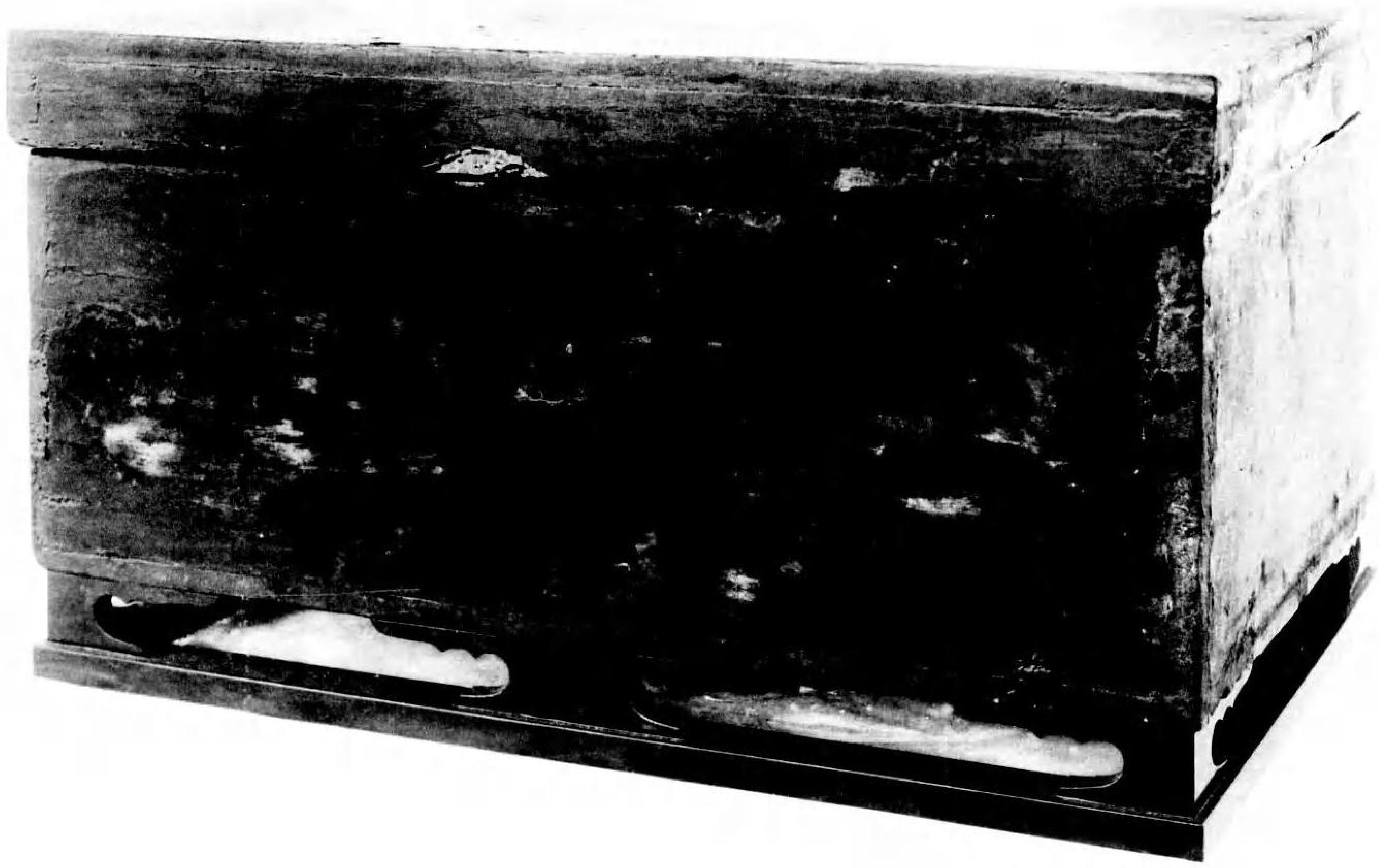
蝶番金具（原寸）

漆箱四合の二（下）　（縮寫約七分ノ四）

竪三五糎　横二三糎二　高一八糎九

木製、黒漆塗、印籠蓋で底に床脚をつけてゐる。床脚には後補の個所が多い。





第六十六圖　漆箱四合の三　（縮寫約七分ノ二）

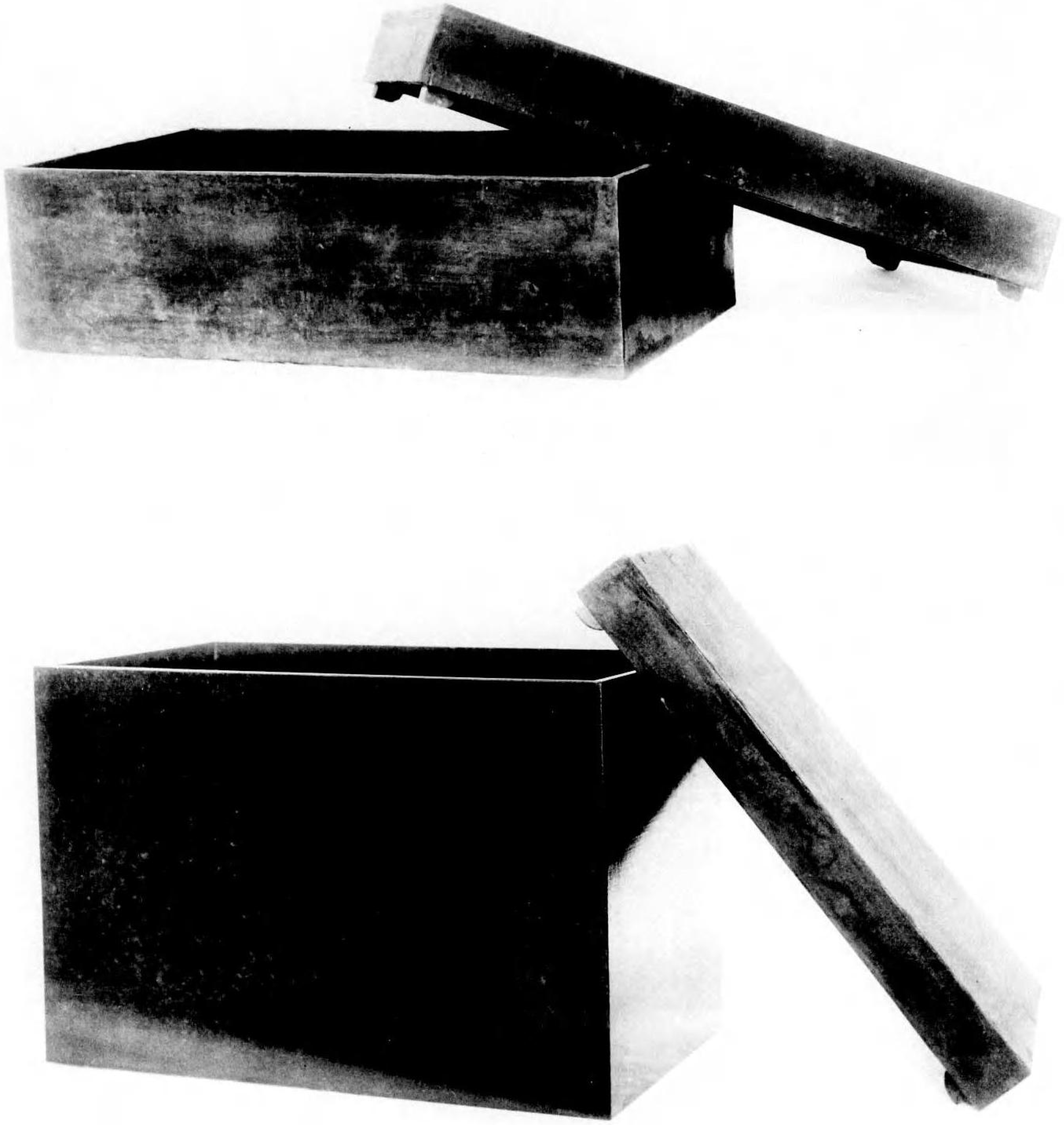
竪五〇糎　横二九糎　高二〇糎二

木製、内面外面共に黒漆塗、表面破損の部分に布の下張りが見えるところがある。蓋内面の四隅には舌狀をつける。

漆箱四合の四　（縮寫約七分ノ二）

竪四六糎七　横二七糎七　高三五糎九

木製内外黒漆塗、蓋四隅に舌狀をつける。舌狀一個新補。

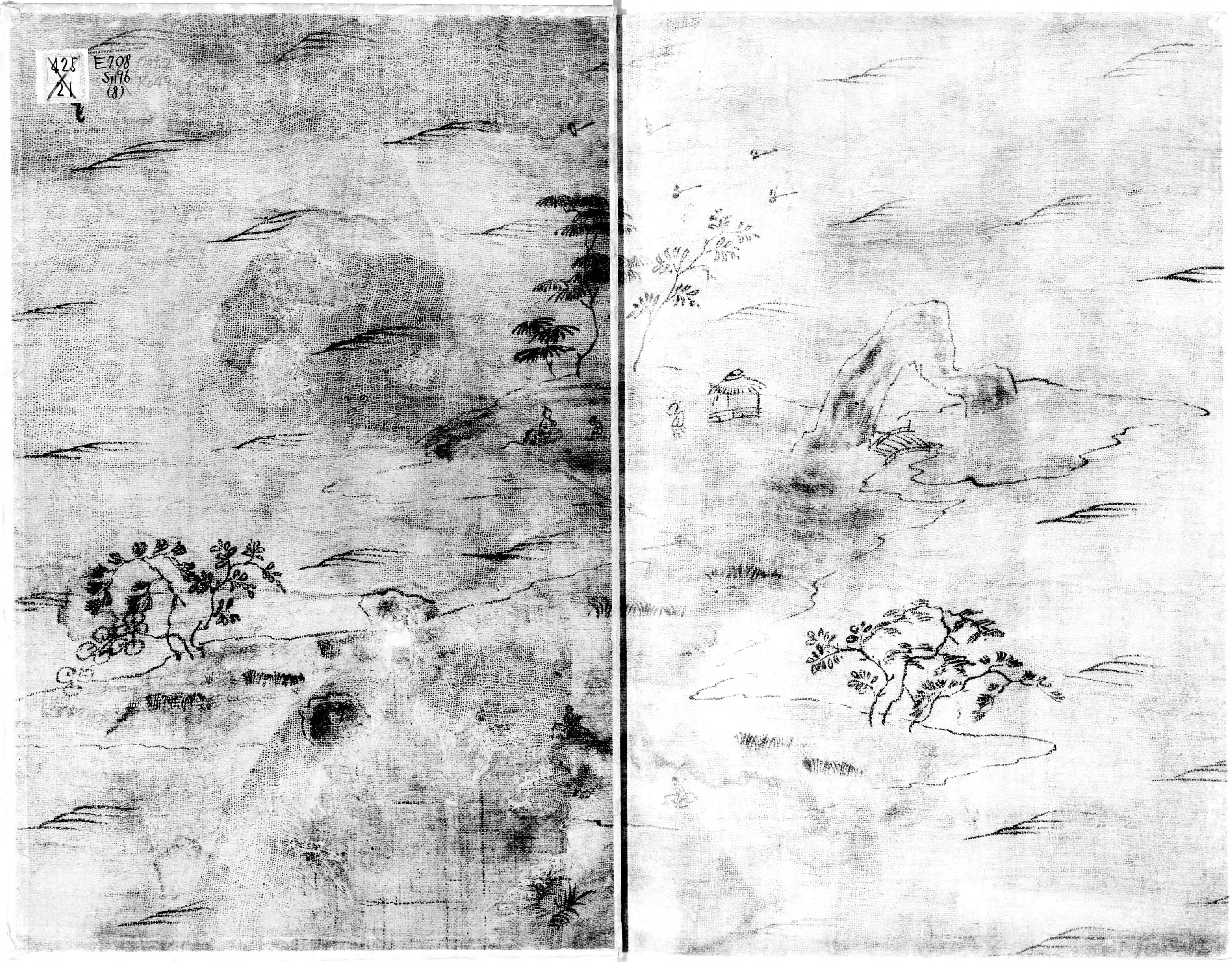


第八輯【定價金貳拾五圓】

昭和十年十一月廿五日印刷
昭和十年十一月三十日發行

帝室博物館

【不許複製】



425
21
E708
SH96
(8)

終